

# 国際ユニヴァーサルデザイン協議会におけるデザイン振興活動

一般財団法人国際ユニヴァーサルデザイン協議会 理事長

静岡文化芸術大学 名誉教授

古瀬 敏

## ◇ はじめに

一般財団法人国際ユニヴァーサルデザイン協議会 (International Association for Universal Design, 略号 IAUD) は日本で最大最古のユニヴァーサルデザイン推進団体です。

ユニヴァーサルデザイン (UD) とは、特殊解ではなく一般解でできるだけ多くの人が使えるデザインを意味します\*<sup>1</sup>が、われわれがIAUDをつくることになったそもそものきっかけは、2002年秋にパシフィコ横浜で国際ユニヴァーサルデザイン会議を開催したときに遡ります。

\* 1 UD概念が広まる前は、人間工学と福祉支援工学、そしてそれらに基づくデザインが中心でした。人間工学はその英語、Ergonomicsという語源が示しているように労働の科学であり、対象としては多数派を暗黙の前提としていました。ただ、戦闘機のレバー誤操作での墜落など不具合なデザインの問題が重要になって、めったに起こらないことへの関心が強くなりました。また一方では、戦争で負傷して故郷に戻って来た元兵士の社会復帰が従前以上に問題となりました。これらの流れが相まって、ごく当たり前であること的前提条件が変わってきたと言えるでしょう。ただ、わかっているでもそれをかたちにすることは容易ではありません。どうしても従来デザインしてきたものに引きずられることもあり、できるだけ使えない人を生み出さないという視点がおろそかになりがちでした。UDはそれに対してノーを突きつけたのです。米国で専門家たちがまとめ上げたものが「UDの7原則」です。それを筆者たちが翻訳したものは下記のウェブにあります。  
[http://www.udit.jp/report/ud\\_7rules.html](http://www.udit.jp/report/ud_7rules.html)

それより前、1998年6月に米国ニューヨークのホフストラ大学で第1回UD国際会議が開催され\*<sup>2</sup>、そこにはわが国から多くの企業デザイナーなどが参加しました【写真1】。

\* 2 ニューヨーク、ホフストラ大学での開催より以前、米国では

## ●写真1 第1回UD国際会議



1998年6月18日から20日にかけてニューヨークのホフストラ大学で開催された第1回UD国際会議での全体会合最終セッション。UDの父と言われるロン・メイスが一番左にいる。彼はこの会議が終了して数日後に心室細動で亡くなった

UDを実践していた複数の大学デザイン学部の年次連絡会があって1995年にStrategies for Teaching Universal Designという本が出版されています。それをつくった編集者であるOstroff女史を1997年1月に日本に招きました。その際にとくに急速な高齢化との関連で日本においてUDへの関心が強いということから、年次連絡会を国際会議に格上げして開催する必然性を肌で感じたようです。

そのころまではふつうのデザイン以外にデザインがやるべきことは障害者対応であると考えていた人が多かったので、「いやそうではない、一般解としてのUDこそが必要」という主張が強く打ち出されていた会議の場において、日本からの参加者が受けたインパクトは非常に大きかったといえます。それまではさほど考えたことがなかったけれど、とくに急速に高齢化が進展しつつある日本のほうが、他の参加先進国よりもずっと問題が切実であるとの認識が共有されました\*<sup>3</sup>。

\* 3 ユニヴァーサルデザインという表現はいかにも米国らしい